

laukikaṃ paramārtham

— *Prasannapadā* 第 24 章第 10 偈導入箇所におけるテキストの問題 —

新作 慶明

はじめに — 『ブラサンナパダー』のテキストについて—

ナーガールジュナ (Nāgārjuna) 作『中論』(Mūlamadhyamakakārikā) の諸注釈の中で、現在完本の形でサンスクリット語テキストが参照可能なのは、チャンドラキールティ (Candrakīrti) 作の『ブラサンナパダー』(*Prasannapadā*) のみである。『ブラサンナパダー』のテキストは、Louis de LA VALLÉE POUSSIN (以下 LVP) によって 1903–1913 年に出版され、およそ 1 世紀が過ぎる今日でも多くの研究者が底本として採用している。しかしながら、LVP のテキストでは参照可能な写本に限られていたこともあって¹、読みの不確定な箇所が少なからず存在する。LVP のテキストが出版されてから現在に至るまでに新たに多くの写本が発見されており、ローマ写本およびチベット語訳との比較考察にもとづいて LVP のテキストに多くの訂正を加えた DE JONG [1978] をはじめとして、今日読み直しの研究がなされはじめている。

そうした読み直しの研究の一つとして、Anne MacDONALD による第 1 章の再校訂がある²。MacDONALD は第 1 章の再校訂作業を通じて、今日参照可能なおよそ 20 の写本のうち、オックスフォード写本 (貝葉写本, O)・東大写本 No.251 (紙写本, T)・ケンブリッジ写本 (紙写本, C)・NGMPP (Nepal German Manuscript Preservation Project) E1294-03 (紙写本, N)・ローマ写本 (紙写本, R) の 5 本の読みが重要であると見なした。そして、これらの 5 本に近年新たに発見されたポタラ写本 (貝葉写本) を加えた six “better” manuscripts を重要視している³。

1 問題の所在 — *laukikaṃ vyavahāram* —

本稿では、『ブラサンナパダー』第 24 章第 10 偈導入箇所における LVP のテキストの問題について考察する。はじめに、『ブラサンナパダー』の当該箇所を見ていこう。

『ブラサンナパダー』(LVP ed. 494.6–15)

ここで、[反論者は] 以下のようにいった。

【問】もし、勝義は無戲論を自性とするならば、まさにそれはそうとしよう。その場合、かの他の勝義でない蘊・界・処・[四] 聖諦・縁起などの教説に、何の必要性があ

¹ LVP が参照した写本はバリ写本・ケンブリッジ写本・カルカッタ写本の 3 本である。Cf. LVP ed. Avant Propos.

² MacDONALD による第 1 章の再校訂テキストは、まもなく出版予定とのことである。また、以下にあげる six “better” manuscripts のうち、ポタラ写本以外の 5 本を用いて第 17 章前半部分 (kk.1–20) の再校訂をおこなった研究として、Kragh [2006] がある。

³ six “better” manuscripts については、MacDONALD [2008] 参照。ポタラ写本を除く 5 本の情報については、Kragh [2006: 36–39] にまとめられている。また、ポタラ写本については米澤 [2004: 56]、および YONEZAWA [2005: 160] 参照。

るのか、というのも、真実でないものは捨てられるべきであるから、捨てられるべきもの、それが説かれることが何になろうか。

【答】答える。それはたしかにそうである。しかし、表現・表現対象、知・知の対象などを特徴とする世間の言語慣習 (laukikaṃ vyavahāram) を承認せずに、勝義は決して説かれえない。説かれえないものは、証得されえない。そして、勝義を証得せずに涅槃は証得されえないと説明するために、

言語慣習によらずに勝義は示されえない。勝義を了解せずに涅槃は証得されえない
(『中論』 24.10)

と [ナーガールジュナは] いった。それゆえ、涅槃を証得する方便であるので、まさに必ず、あるがままの世俗がまずはじめに認められるべきである。水を求める人が、[まずはじめに] 器 (を求めるの) と同じように、

PSP (LVP ed. 494.6–15)

atrāha / yadi tarhi paramārtho niṣprapañcasvabhāvaḥ sa evāstu tat kim anayā `parayā skandhadhātṽyatanāryasatyapratītyasamutpādādideśanayā prayojanam aparamāṛthayā / atattvaṃ hi parityājyaṃ yac ca parityājyaṃ kiṃ tenopadiṣṭena //
ucyate / satyam etad evaⁱ kiṃ tu laukikaṃ vyavahāram anabhyupagamyābhidhānābhidheyajñānajñeyādilakṣaṇam aśakya eva paramārtho deśayituṃ / adeśitaś ca na śakyo `dhigantum / anadhigamya ca paramārthaṃ na śakyaṃ nirvāṇam adhigantum iti pratipādayann āha /

**vyavahāram anāsṛitya paramārtho na deśyate /
paramārtham anāgamyā nirvāṇam nādhigamyate // (MMK 24.10)**

iti / tasmān nirvāṇādhigamopāyatvād avaśyam eva yathāvasthitā saṃvṛtir ādāv evābhyupeyā bhājanam iva salilārthineti // [ⁱ *evaṃ OTCNR]

本稿でとりあげるのは、上に引用した LVP のテキストにおける「世間の言語慣習」(laukikaṃ vyavahāram) である。筆者は、MacDONALD が重要とする諸写本を確認したが、laukikaṃ vyavahāram と記されている写本は存在しなかった。諸写本における記載状況は、以下の通りである。

- オックスフォード写本 → laukikaṃ padārtham
- 東大写本 No.251 ・ ケンブリッジ写本 ・ NGMPP E1294-03 ・ ローマ写本 ・ ボタラ写本⁴ → laukikaṃ paramārtham

また岸根 [2001c] 1782.n.170 によると⁵、岸根が参照した 11 本すべて (LVP が参照した

⁴ 筆者はボタラ写本を直接参照することはできなかったが、大正大学の米澤嘉康先生にご確認いただき、ボタラ写本には laukikaṃ paramārtham と記されているとの貴重な情報をいただいた。衷心より感謝申し上げます。

⁵ 岸根 [2001b] [2001c] [2002] は、『ブラサンナバダー』第 24 章の 11 本の写本を用いた校訂テキストである。岸根の用いた写本には、LVP が用いたパリ写本・ケンブリッジ写本・カルカッタ写本も含まれているが、MacDONALD が重要視する写本のなかでは、ケンブリッジ写本・東大写本 No.251

3 写本も含む)において, laukikaṃ paramārtham と記されているという. そして, チベット語訳の五大版本とも “’jig rten pa’i don dam pa” (*laukikaṃ paramārtham) と翻訳されている⁶. 岸根は, LVP が写本やチベット語訳に根拠なく, しかも注記をせずに laukikaṃ vyavahāram と修正したと思われることを問題視し, laukikaṃ paramārtham の読みを採用している⁷.

以上のように, LVP のテキストにおける “laukikaṃ vyavahāram” は, 写本およびチベット語訳に根拠を求めることはできないのである. LVP は, 直前で vyavahāra の語が2度「表現・表現対象, 知・知の対象など」(abhidhānābhidheyajñānajñeyādi) と結びついていることもあって⁸, LVP の参照した写本に laukikaṃ paramārtham と記されているのを laukikaṃ vyavahāram と修正したと思われるのである. そしてこの LVP の修正は, 文脈を考慮するならば妥当であるように思われるため⁹, 従来の研究ではほとんど問題とならなかった.

しかしながら筆者は, 写本やチベット語訳に根拠のないテキストの修正を問題視する岸根と見解を同じくする. すると, LVP が laukikaṃ vyavahāram と修正したと思われるテキストは, 諸写本およびチベット語訳が根拠となる “laukikaṃ paramārtham”, もしくはオックスフォード写本のみが根拠となる “laukikaṃ padārtham” を採用する必要があることになる. 本稿では, オックスフォード写本以外の諸写本およびチベット語訳が根拠となる, 「世間的な勝義」(laukikaṃ paramārtham) の妥当性およびその意味内容について検討していこう¹⁰.

の2本だけにとどまる. なお, 岸根の参照した写本については, 岸根 [2001b: 1003–1004] にあげられている.

⁶ Cf. Cone ed. ’a 162a6, sDe dge ed. ’a 164a2–3, Golden ed. ’a 230b4, sNar thang ed. ’a 185b7, Peking ed. ’a 186a3. チベットに伝承された『ブラサンナバダー』のテキストにおいて, 当該箇所は “’jig rten pa’i don dam pa” と伝えられていたことは, ツォンカパの *Rigs pa’i rgya mtsho* (『正理大海』) で確認できる. 『正理大海』は『ブラサンナバダー』に多くを依拠してツォンカパ独自の説明を加える形で『中論』を注釈する著作であり, 『ブラサンナバダー』の本文の多くがそのまま引用されているテキストであるが, “’jig rten pa’i don dam pa” の表現が確認される. Cf. 『正理大海』 Zhol ed. Ba 246b4; sKu ’bum ed. Ba 255a6.

⁷ Cf. 岸根 [2001c: 1767.25]. 当該箇所のテキストの問題については, 岸根 [2001a: 124.n.62, 63] においても言及されている.

⁸ PSP: *atha vā samvṛtiḥ samketo lokavyavahāra ity arthaḥ / sa cābhidhānābhidheyajñānajñeyādilakṣaṇaḥ //* [LVP ed. 492.11–12]; *sarva evāyam abhidhānābhidheyajñānajñeyādivyavahāro ’śeṣo lokasamvṛtisatyam ity ucyate* [LVP ed. 493.5–6]

⁹ このような印象をもっているのは, 筆者だけではない. DE JONG は, ローマ写本では laukikaṃ paramārtham と記されていることに言及しつつも, LVP のテキストの読みをとっている. Cf. DE JONG [1978: 242.29–30]. また, 主な翻訳でも LVP の laukikaṃ vyavahāram の読みが採用されている. 本多 [1988: 448.16–17] 「世間一般の習慣を承認せずしては」; 奥住 [1988: 757.12] 「世間において現に成立している言語慣習・習慣の設定を承認せずには」; 丹治 [2006: 118.10] 「世間の言説を承認せずに」. 一方, 岸根 [2001a: 91.8–9], 那須 [2004: 96.16–17] では, それぞれ「世間的な勝義を承認しなければ」(岸根), 「世間的勝義を認めなくては」(那須) と読んでいる. 訳語の上では筆者と同じであるが, 内容理解に関して筆者とは異なる見解が提示されている.

¹⁰ 本稿では, オックスフォード写本だけに見られる laukikaṃ padārtham の読みについて検討しない. ボカラ写本とともに貝葉写本であるオックスフォード写本(書写年代は12後半–13世紀ごろと考えられている. Cf. MacDONALD [2008: 19])は, その他の紙写本が17–19世紀ごろと推定されていることを考慮にいれると, 古い読みを保持している可能性を否定できない. しかしながら, 11世紀後

2 世間的な勝義

2.1 二種の言語慣習

「世間的な勝義」の用例は、『プラサンナパダー』には見られないが、チャンドラキールティ作といわれる『六十頌如理論注』(Yuktiṣaṣṭikāvṛtti)、および『四百論釈』(Catuḥśatakaṭikā)に見られることが、岸根により指摘されている¹¹。岸根は、同じくチャンドラキールティ作といわれる『空七十論注』(Śūnyatāsaptatīvṛtti)において言語慣習が勝義と世俗の区別によって、二種(以下では便宜上、その二種を「勝義的な言語慣習」と「世俗的な言語慣習」と記す)に分けられることをとりあげて、この「世間的な勝義」を解釈する。まずは、岸根の解釈を知るために『空七十論注』を見てみよう。

『空七十論注』

世俗という語は、世間の言語慣習と同義語(*paryāya)ではない。なぜならば、世俗と勝義の区別によってそれ(世間の言語慣習)は、二種として確立しているのだから、また言語慣習の一方を世俗の語によって表現するのであるから¹²。

『プラサンナパダー』において世俗の語義解釈は3通りになされおり、第3番目として「あるいはまた、世俗とは言語協約、[すなわち]世間の言語慣習という意味である」¹³と解釈されることはよく知られている。しかし、ここでは「世俗」(*saṃvṛti)と「世間の言語慣習」(*lokavyavahāra)が同義語(*paryāya)でないといわれ、言語慣習が世俗と勝義の区別によって二種に分けられている。『空七十論注』では「勝義的な言語慣習」についての詳しい説明はないが、岸根はこの「勝義的な言語慣習」に類似する概念として、「世間的な勝義」をあげている¹⁴。しかしながら、この解釈については問題があるように思われるので、以下に岸根があげる『六十頌如理論注』および『四百論釈』を再度とりあげ、「世間的な勝義」の意味内容について再考してみよう。

半に翻訳されたチベット語訳で“'jig rten pa'i don dam pa”(*laukikaṃ paramārtham)と翻訳されていること、ポタラ写本に laukikaṃ paramārtham と記されていることから、古い読みを保持するテキストでも laukikaṃ paramārtham と読まれていたことが推察される。したがって、本稿では考察の対象から外すことにする。

¹¹ Cf. 岸根 [2001a: 90–92] .

¹² ŚSV: kun rdzob kyi sgra ni 'jig rten pa'i tha snyad kyi nmam grangs ma yin te / kun rdzob dang don dam pa'i dbye bas de ni nmam pa gnyis su gnas pa'i phyir dang tha snyad kyi phyogs gcig la kun rdzob kyi sgras brjod pa'i phyir ro // [ERB ed. 212.40–213.1]

¹³ PSP: atha vā saṃvṛtiḥ saṃketo lokavyavahāra ity arthaḥ / [LVP ed. 492.11–12]

¹⁴ 「営為(言語慣習)に勝義的なものを想定する発想は『空七十論注』に見られるものである。しかし、これまでほとんど注目されなかったが、他の著作にも類似の表現が見られる。それは「世間的な勝義」(laukika-paramārtha, あるいは、laukikaṃ paramārtham)というタームである。」[「(言語慣習)」は筆者による補い] 岸根 [2001a: 90.10–12] .

2.2 『六十頌如理論注』における用例¹⁵

すなわち、自内証を離れているので、

寂靜の意味 (*viviktārtha) を知らずに、聞くことだけに住して福德をなさない人たち、彼らは甚だ劣った人たちであり、破滅する。(31)

実に、まさに世間的な勝義に立脚して (sthitvā)¹⁶、不顛倒で清浄な面が増大しており、空性という真実を自内証している人が、福德も非福もなさないというのは道理である。一方、空性を自内証せずに、空性という言葉を書くことだけによって、なすべきことをなす人たちの行いをまねている人たちは、不善の業だけを起こすのであって、善の業を(起こすの)ではない¹⁷。

上の引用だけでは、「世間的な勝義」の意味は必ずしも明確でないが¹⁸、先行する第30偈の議論を見ると、内容が明らかとなってくる。第30偈導入箇所では、「もし世界 (*jagat) が幻の如く自性空であるならば、ここで世尊によって真実が説かれずに、この真実でない「蘊・界・処は存在する」と説かれることが何になろうか¹⁹、という反論者の問いがあり、第31偈の議論はこの反論者への一連の回答の中に位置づけられる。第30偈の議論では、蘊・界などの真実でないものが勝義に入る方便として必要であると説明される²⁰。また、

¹⁵ 『六十頌如理論注』は、これまでサンスクリット原典が発見されておらず、チベット語訳でのみ参照可能なテキストであったが、近年本テキストのサンスクリット語写本の断片(1フォリオ、kk.30-34 およびその注釈部分に相当)が発見され、その Transliteration (YE [2013]) が発表されている。貴重な新資料であることに疑いないが、Transliteration という性質上そのままでは読むことができないので、ここでの翻訳はチベット語訳にもとづく。

¹⁶ 「世間的な勝義に立脚して」という翻訳は、チベット語訳 “’jig rten pa nyid kyi don dam pa la gnas te” (*laukika eva hi paramārthe sthitvā) にもとづく。

¹⁷ YŠV (Tib) : ’di ltar so so rang gis rtogs pa dang bral ba’i phyir /
rnam par dben don mi shes la // thos pa tsam la ’jug byed cing //
gang rnam bsod nams mi byed pa // skyes bu tha shal de dag brlag // (31)

’jig rten pa nyid kyi don dam pa la gnas te phyin ci ma log pa rnam par byang ba’i phyogs phun sum tshogs shing stong pa nyid kyi de kho na so so rang gis rtogs pa na bsod nams dang bsod nams ma yin pa mi bya ba ni rigs so // gang dag stong pa nyid so so rang gis rtogs pa med par stong pa nyid kyi sgra thos pa tsam gyis bya ba byas pa rnam kyi spyod pa ltar rjes su ’chos pa ni mi dge ba’i las nyid la zhugs pa yin gyi / dge ba la ni ma yin te / [SCHERRER-SCHAUB ed. 72.16-27]

YŠV (Skt) : tathā hi pratyātmādhigamavihārāt

vi[v]i(ktārtham ajānantah) śrutamātrāvalambinaḥ </>

ye na kurvanti puṇyāni hatās te puruṣādhamāḥ / (31)

laukika eva hi paramārthasthitvā saṃvṛddhāvīparitavyavadānapakṣasya pratyātmādhitaśūnyatāmatatvasya puṇyāpuṇyayor akāraṇaṃ nyāyaḥ / ye tu pratyātmam anavetya śūnyatām śūnyatāśabdaśravaṇamātr(amaḥ kṛtakṛtyānā)ṇ caritam anukurvāṇāḥ pravartante {} akuṣa<la> eva karmaṇi na kuśale / [YE [2013: 236.18-237.5]]

¹⁸ 岸根 [2001a: 90-92] において、当該の『六十頌如理論注』の内容はとくに言及されていない。

¹⁹ YŠV: ’dir smras pa / gal te ’gro ba sgyu ma bzhin du rang bzhin gyis stong na ’di la bcom ldan ’das kyi de kho na gang yin pa de mi bstan par phung po dang khams dang skye mched yod do // zhes bstan pa bden pa ma yin pa ’dis ci zhiḡ bya / [SCHERRER-SCHAUB ed. 70.1-5]

²⁰ YŠV: brdzun yang dgos pa yod na ni la la bstan dgos te ’di la ni don dam pa la ’jug pa’i thabs su dgos pa yod pas phung po dang khams la sogs pa bden pa ma yin yang yod do // zhes thog ma nyid du bstan pa’i dbang du byas kyi / de kho na yang dag pa stong pa nyid ni ma yin te / de la thog mar bstan na don med par ’gyur ba’i phyir ro // [SCHERRER-SCHAUB ed. 70.8-70.12]

智慧の浄化されていない人たちがはじめに空性の見解に導かれるならば、甚だ混乱することになるので、聖者は空性をはじめから説かないとも説明されている²¹。これらによって、「蘊・界・処は存在する」という初期仏教以来の伝統的な教説は、智慧の浄化されていない人たちに勝義の教説としての空を説く前段階として必要である、と示されていることになる。

このような議論の背景を考慮にいと、「世間的な勝義に立脚して」が意味することは、智慧の浄化されていない人が認める「蘊・界・処は存在する」という伝統的教説を承認する立場に立脚して²²、という意味であると解釈することができるだろう。つまり、智慧の浄化されていない世間の人々が認めること（＝「世間的な勝義」）を承認して、不顛倒で清浄な部分が増大している人は、空性という真実を自内証するというのが道理である、と説明されているのである。

- 『六十頌如理論注』では、智慧の浄化されていない人（＝世間の人）には勝義としての空を説く前段階として、まずはじめに彼らが認める「蘊・界・処は存在する」という伝統的教説を説く必要がある
- [智慧の浄化されていない人（＝世間の人）が認める]「世間的な勝義」に立脚して、不顛倒で清浄な面が増大している人は、空性という真実を自内証する

2.3 『四百論釈』における用例²³

【問】もし、諸々の事物は自性空に他ならないならば、なぜ無明をはじめとする次第によって、有情（世間）・器世間の展開が説かれるのであるか。[勝義であるので]自性空性だけが、説かれるべきでないのか。

【答】それはそうでない。展開（pravṛtti, 流転）を本質とする世間的な勝義をはじめに説かず、自性空であることを特徴とする真実を示しえないのである。それゆえ、真実に入る階梯であるので、展開の教示もなされるべきである。あらゆる執着を捨て去ることによって、[涅槃という]安楽を獲得する原因である自性空性の説示もなされるべきである。そして、この如来の教えにおいて、

世間的な教説があるところ、そこにおいて展開が説明される。勝義が語られると

²¹ YŚV: skye bo blo gros ma byang ba dag thog ma kho nar stong pa nyid du lta ba la btsud na shin tu mgo rmongs par 'gyur te / de bas na 'phags pa mams stong pa nyid thog ma kho nar mi ston te / [SCHERRER-SCHAUB ed. 70.20–70.22]

²² 『入中論疏』(Madhyamakāvataṛāṅkā)では、“la gnas te” (*sthītā) について次のように注釈される箇所がある。「聖者のごらんになっていることに立脚して (la gnas te, *sthītā) というのは、聖者のごらんになっていることを承認するならば (khas len na), [すなわち] 聖者のごらんになっていることに依拠して (la ltos nas) という意味である。」(MAT: gang gi tshe 'phags pa'i gzigs pa la gnas te zhes bya bya ni 'phags pa'i gzigs pa khas len na ste / 'phags pa'i gzigs pa la ltos(ltos D; bltos P) nas so zhes bya ba'i tha tshig go // [D ra 152b2–3; P ra 183b6–7])。したがって、この『六十頌如理論注』における「立脚して」(sthītā) という語も、「承認して」あるいは「依拠して」と同等の意味であると解釈する。

²³ 当該の『四百論釈』は、サンスクリット語のテキストとチベット語訳のテキストに若干の相違が見られる。ここでの翻訳は、適宜文脈に適していると思われる方のテキストにもとづく。なお、翻訳中の [] はチベット語訳のみに見られる語である。

ころ、そこにおいて抑止 (nivṛtti, 還滅) が説明される。(8.8)²⁴

当該の『四百論釈』の議論は、『六十頌如理論注』と同じく、自性空だけが説かれずに、なぜ有情世間・器世間 (= 輪廻) の展開 (pravṛtti) が説かれるのか、という反論者の問いではじまる。その反論者への回答として、[輪廻の] 展開を本質とする「世間的な勝義」をはじめに説くことなくして、自性空という真実を説くことはできないといわれている。さらに、『四百論』8.8 では、「世間的な教説」と「勝義が語られること」 (= 「勝義的な教説」) が分けられ、世間的な教説があるところでは輪廻の展開が、勝義 (= 自性空) が語られるところでは輪廻の [展開の] 抑止 (nivṛtti) が説明される、といわれている。つまりここでも、勝義の教説 (= 自性空) に相当する輪廻の [展開の] 抑止がはじめから説かれるのではなく、その前段階として、「世間的な勝義」である輪廻の展開を説くことが必要であると示されているのである。

- 『四百論釈』では、「世間的な勝義」は、世間的な教説で示される輪廻の展開のことをさす
- 「世間的な勝義」 (= 輪廻の展開) は、自性空 (= 輪廻の [展開の] 抑止) を説く前段階として必要である

3 凡夫にとっての勝義

さて、ここまで「世間的な勝義」の具体的な用例を見てきたが、次にチャンドラキールティが「勝義」の語をどのように用いるのかについて、主体の限定が付された相対的な「勝義」が説かれる『入中論釈』 (*Madhyamakāvātārabhāṣya*) を見ていこう。

『入中論釈』

その中で、世間世俗諦が説明されるべきであるので、[以下のように] 説く。

²⁴ CŚṬ (Skt) : yadī khalu svabhāvaśūnyā eva padārthāḥ kim artham avidyādinā krameṇa sattvabhājanalokasya pravṛttir upadiśyate / nanu svabhāvaparamārthatvāt svabhāvaśūnyataiva kevalam upadeṣṭavyeti / naitad evam / naiva hi laukikaṃ pravṛtyātmakaṃ paramārthaṃ pūrvam anupadiśya śakyaṃ svabhāvaśūnyatālakṣaṇaṃ tattvam ādarśayitum iti / tattvāvatārasopānabhūtatvāt pravṛttypadeśo 'pi kartavyaḥ / sarvasaṅgaparitṛyāgena nivṛttisukhāvāptinimittaṃ svabhāvaśūnyatopadeśo 'pi kartavyaḥ tad atra tathāgate pravacane //

laukikī deśanā yatra pravṛttis tatra varṇyate /

paramārthakathā yatra nivṛttis tatra varṇyate // (8.8) [SUZUKI ed. 126.10–128.2]

CŚṬ (Tib) : gal te dngos po mams rang bzhin gyis stong pa kho na yin na ci'i phyir ma rig pa la sogs pa'i rim pas sems can dang snod kyi 'jig rten gyi 'jug pa bstan te / [don dam pa yin pa'i phyir] rang bzhin gyis stong pa nyid kho na cig kyang nye bar bstan par bya bar 'gyur ba ma yin nam zhe na 'di ni de lta ma yin te / dang po 'jig rten pa'i don dam par 'jug pa'i bdag nyid can nye bar ma bstan par ni de kho na nyid rang bzhin gyis stong pa nyid kyi mtshan nyid can kun nas bstan par mi nus te / [de'i phyir] [de kho na nyid kyi bdud rtsi la 'jug pa'i skabs su gyur pa nyid kyi phyir na] 'jug pa nye bar bstan pa yang bya dgos la / chags pa thams cad yongs su btang bas [mya ngan las 'das pa'i bde ba] thob pa'i rgyu rang bzhin gyis stong pa nyid nye bar ston par yang bya dgos so // de'i phyir 'dir de bzhin gshegs pa'i gsung rab /

gang las 'jig rten bstan 'byung ba // de las 'jug pa gsungs pa ste //

gang las don dam bsnyad 'byung ba // de las ldog pa gsungs pa'o // (8.8) [SUZUKI ed. 127.17–129.4]

無知は自性を覆うものである。世俗である。それ（世俗）によって作られたものが真実として顕現しているところの、それを世俗諦とかの牟尼はいった。作られた事物は世俗である。（6.28）

その（偈の）中で、それは有情があるがままの事物を見ることを惑わすので、「無知」である。すなわち、本性をもたない事物を増益し、自性を見ることをさまたげること本質とする無明が、「世俗」である。その世俗によって真実として顕現し、自性をもたないにもかかわらず自性をもつものとしてそれぞれに顕現するもの、それは倒錯した世間にとって世俗として真実であるので、「世間世俗諦」である。...

それ（世俗諦）についてはまた、汚れた無明を断っており、諸行を影像などの存在と同じように見る声聞・独覚・菩薩には、作られたものを本質とするものであって、真実ではない。なぜなら、真実と執着することがないのであるから。愚か者には欺くものであり、それ（愚か者）とは別なもの（聖者）には、幻などのように縁起したものに他ならないので、「世俗にすぎないもの（唯世俗）」(saṃvṛtimātrakam)²⁵となる。...

以上のように、まずかの世尊は世俗諦と世俗にすぎないもの（唯世俗）をお説きになっているのである。その中で、「凡夫にとっての勝義」、他ならぬそれは顕現あるものを対象領域とする聖者たちにとって「世俗にすぎないもの」であって、それ（世俗にすぎないもの）の自性である空性、それは彼ら（聖者）にとっての勝義である。諸仏にとっての勝義は、自性そのものであり、それ（自性そのもの）はまた、欺くことがないので勝義諦であって、それ（勝義諦）は彼ら（諸仏）にとって、自内証されるべきものである。世俗諦は欺くものである。勝義諦ではないのである²⁶。

²⁵ “saṃvṛtimātrakam” の語は、**Lakṣaṇāṭīkā* で確認できる。Cf. YONEZAWA [2013: 126.14–15] .

²⁶ MABh: de la 'jig rten gyi kun rdzob kyi bden pa bstan par bya ba'i phyir bshad pa /
gti mug rang bzhin sgrub phyir kun rdzob ste // des gang bcos ma bden par snang de ni //
kun rdzob bden zhes thub pa des gsungs te // bcos mar gyur pa'i dngos ni kun rdzob tu'o //6.28
 (mohaḥ svabhāvāvaraṇād dhi saṃvṛtiḥ / satyaṃ tayā khyāti yad eva kṛtrīmam /
 jagāda tat saṃvṛtisatyam ity asau / muniḥ padārthaṃ kṛtakaṇ ca saṃvṛtiḥ //6.28 [Lr [2012:
 6.13–16]])

de la 'dis sems can rnams ji ltar gnas pa'i dngos po lta ba la rmongs par byed pas na gti mug ste /ⁱ ma rig paⁱ dngos po'i rang gi ngo bo yod pa ma yin pa sgro 'dogs par byed pa rang bzhin mthong ba la sgrub pa'i bdag nyid can ni kun rdzob bo // kun rdzob des gang zhig bden par snang zhing rang bzhin med bzhin du rang bzhin du so sor snang ba de ni 'jig rten phyin ci log tu gyur pa'i kun rdzob tuⁱⁱ bden pas 'jig rten gyi kun rdzob kyi bden paⁱⁱ ste /... [ⁱ ma rig pa D; ma rig pa dang P, LVP ed. ⁱⁱ bden pas 'jig rten gyi kun rdzob kyi bden pa D; bden pa P, LVP ed.] [D 'a 254b4–6; P 'a 304a7–304b1; LVP ed. 106.19–107.10]

de yangⁱⁱⁱ nyan thos dang rang sangs rgyas dang byang chub sems dpa' nyon mongs pa can gyi ma rig pa spangs pa / 'du byed gzugs brnyan la sogs pa'i yod pa nyid dang 'dra bar gzigs pa rnams la ni bcos ma'i rang bzhin yin gyi / bden pa ni ma yin te / bden par mngon par rlom pa med pa'i phyir ro // byis pa rnams la ni bslu bar byed pa yin la / de las gzhan pa rnams la ni sgyu ma la sogs pa ltar rten cing 'brel par 'byung ba nyid kyi kun rdzob tsam du 'gyur ro /... [ⁱⁱⁱ la D; yang P, LVP ed.] [D 'a 255a1–3; P 'a 304b4–6; LVP ed. 107.19–108.6]

de ltar na re zhig bcom ldan 'das des kun rdzob kyi bden pa dang kun rdzob tsam du gsungs pa yin no // de la so so'i skye bo rnams kyi don dam pa gang yin pa de nyid 'phags pa snang ba dang bcas pa'i spyod yul can rnams kyi kun rdzob tsam yin la / de'i rang bzhin stong pa nyid gang yin pa de ni de rnams kyi don dam pa'o // sangs rgyas mams kyi don dam pa ni rang bzhin nyid yin zhing / de yang slu ba med

『入中論釈』において、世間（の人）にとって真実として現れているものである「世間世俗諦」（*lokasaṃvṛtisatyā）は、声聞・独覚・菩薩にとって真実ではなく、「世俗にすぎないもの」（saṃvṛtimātrakaṃ）であると説かれている。そして、「世間世俗諦」と「世俗にすぎないもの」の関係は、「凡夫にとっての勝義」と「聖者たちにとって世俗にすぎないもの」と言い換えられている。また、「凡夫にとっての勝義」だけが言及されるだけでなく、世俗にすぎないものの自性である空性は「聖者たちにとっての勝義」であり、「諸仏にとっての勝義」は自性そのもの（＝勝義諦）であるとも説かれており、凡夫・聖者・仏という主体の限定が付された相対的な「勝義」が説かれているのである。

- 『入中論釈』では、世間（の人）に真実として現れている「世間世俗諦」は、「凡夫にとっての勝義」と言い換えられている
- 凡夫・聖者・仏という主体の違いによる相対的な「勝義」が説かれている

4 チャンドラキールティにおける世間的な勝義

本稿では、『ブラスンナパダー』第24章10偈導入箇所において、LVPが「世間の言語慣習」（laukikaṃ vyavahāram）と読むテキストを批判的にとりあげ、オックスフォード写本以外の諸写本およびチベット語訳が根拠となる、「世間的な勝義」（laukikaṃ paramārtham）の意味内容について、『六十頌如理論注』および『四百論釈』の用例を考察してきた。両テキストではともに、勝義の教説としての空がはじめから説かれずに、なぜ「蘊・界・処は存在する」あるいは「輪廻の展開」という伝統的な教説が説かれるのか、という反論者の問いがあり、その反論者に対する回答において「世間的な勝義」が見られるという共通点を確認された。そして、両テキストにおける「世間的な勝義」は、空性という真実を自内証する前段階として立脚すべき世間の人々が認める伝統的な教説で示されること（『六十頌如理論注』）、あるいは勝義の教説（＝自性空）が説かれる前段階として世間的な教説で示されること（『四百論釈』）であるとも確認された。一方、『入中論釈』では、凡夫・聖者・仏という主体の限定が付された相対的な「勝義」が説かれており、世間の人に真実として現れている世俗諦（＝世間世俗諦）は、「凡夫にとっての勝義」と言い換えられていた。主体の限定でこそないが、「世間的な勝義」も「世間的な」（laukika）という限定の付された「勝義」であり、その場合の「世間的な」という限定は、『六十頌如理論注』・『四百論釈』の用例から見ても、「世間の人に関する」という意味であると考えてよいであろう。つまり、「世間的な勝義」の意味内容は、伝統的な教説あるいは世間的な教説で示されることであり、文字通りの意味は、「世間の（人に関する）勝義」となるのである²⁷。

pa nyid kyiis don dam pa'i bden pa yin la / de ni de nmams kyi ^{iv}so so ^{iv}rang gis rig par bya ba yin no // kun rdzob kyi bden pa ni slu bar byed pa nyid kyi phyir don dam pa'i bden pa ma yin no // [^{iv} so so D, P; so sor LVP ed.] [D 'a 255a4-6; P 'a 304b8-305a3; LVP ed. 108.11-20]

²⁷ 『入中論疏』において、当該の『ブラスンナパダー』を引用する箇所では「表現・表現対象、知と知の対象などを特徴とする世間的な勝義を承認しないならば、勝義諦は示されえず」（MAṬ: rjod pa byed pa dang / brjod par bya ba dang / shes pa dang / shes bya la sogs pa'i mtshan nyid can 'jig rten pa'i don dam pa (don dam pa'i D; don dam pa P) khas ma blangs na don dam pa'i bden pa bstan par mi nus la [D ra 158b6-7; P ra 191a8-191b1]) と「世間的な勝義」が用いられているが、ジャヤーナンダ (Jayānanda) 自身のことばで同内容のことを説明する箇所では、「世間的な知と知の対象、表現対

以上のことから、「世間的な勝義」は『空七十論注』における「勝義的な言語慣習」に相当する概念として解釈することはできない。「世間的な勝義」はむしろ、二種の言語慣習に当てはめて考えるならば、「世俗的な言語慣習」（「勝義的な言語慣習」は「勝義の教説」（=自性空）にあたる）に相当するのである。

最後に『プラサンナパダー』に議論を戻してみよう。当該箇所では、「無戲論の勝義だけが説かれず、なぜ勝義でない蘊・界・処・[四] 聖諦・縁起などが説かれるのか」という反論者の問いからはじまり、「表現・表現対象、知・知の対象などを特徴とする世間的な勝義を承認せずに、勝義は示されえない」と、勝義としての空を説く前段階として「世間的な勝義」が必要であるということが確認される。この議論の流れは、『六十頌如理論注』・『四百論釈』と共通しており、ここでの「世間的な勝義」の意味内容も、「世間の人が認める伝統的な教説で示されること」と解釈することができるだろう。

したがって、LVP のテキストにおける「世間の言語慣習」(laukikaṃ vyavahāram) は、岸根の指摘する通り、諸写本およびチベット語訳に根拠を見いだすことのできる、「世間的な勝義」(laukikaṃ paramārtham) と修正することが妥当である。しかしながら、「世間的な勝義」は、岸根のいう『空七十論注』における「勝義的な言語慣習」に相当するものではなく、伝統的な教説あるいは世間的な教説で示される「世間の（人に関する）勝義」を意味するのである。

〈略号および使用テキスト〉

- CŚṬ *Catuḥśatakaṭīkā.*
Sanskrit fragments and Tibetan translation of Candrakīrti's Bodhisattvayogācāra-catuḥśatakaṭīkā, ed. by Kōshin SUZUKI, The Sankibo Press, Tokyo, 1994.
- MA *Madhyamakāvatārikā.*
 Chapter 6 kk. 1–97: See L₁ [2012] .
- MABh *Madhyamakāvatārabhāṣya.* D No. 3862; P No.5263.
Madhyamakāvatāra par Candrakīrti, éd. par Louis de LA VALLÉE POUSSIN, Bibliotheca Buddhica IX, St. Pétersbourg, 1907–1912, repr. Tokyo, 1977.
- MAṬ *Madhyamakāvatāraṭīkā.* D No.3870; P No. 5271.
- MMK *Mūlamadhyamakakārikā.*
Nāgārjuna Mūlamadhyamakakārikāḥ, ed. by J.W. DE JONG, Adyar Library and Research Centre, Madras, 1977.

象と表現を特徴とする世俗諦を承認しないならば、勝義諦は示されえず」（MAṬ: 'jig rten pa'i shes pa dang / shes bya dang / brjod par bya ba dang / rjod par byed pa'i mtshan nyid can gyi kun rdzob kyi bden pa khas ma blangs na don dam pa'i bden pa bstan par mi nus la [D ra 158a2–3; P ra 190b1–2]), あるいは「世間的な知と知の対象、表現と表現対象を特徴とする戲論を承認しないならば、勝義諦は示されえず」（MAṬ: 'jig rten pa'i shes pa dang / shes bya dang / rjod par byed pa dang / brjod par bya ba'i mtshan nyid can gyi spros pa rnamz khas ma blangs na don dam pa'i bden pa bstan par mi nus la(mi nus pas D; mi nus la P) [D ra 199b4–5; P ra 240b8–241a1]) と、「[世間的な] 勝義」のかわりに「[世間的な] 世俗諦」もしくは「[世間的な] 戲論」と説かれていることにも言及しておこう。

- PSP *Prasannapadā*.
Mūlamadhyamakākārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti, éd. par Louis de LA VALLÉE POUSSIN, Bibliotheca Buddhica IV, St. Pétersbourg, 1903–13, repr. Tokyo, 1977.
Chapter 24: See also 岸根 [2001b] [2001c] [2002] .
- ŚSV *Śūnyatāsaptatiṣṭi*. See ERB [1997] .
- YŠV *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti*. See SCHERRER-SCHAUB [1991] .
- 『正理大海』 *Rigs pa'i rgya mtsho*.
dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho, Zhol ed. Ba.; sKu 'bum ed. Ba.

(参考文献)

- DE JONG, J. W.
[1978] “Textcritical Notes on the *Prasannapadā*,” *Indo-Iranian Journal* 20, pp. 25–59, 217–252.
- ERB, Felix [1997] *Śūnyatāsaptatiṣṭi: Candrakīrtis Kommentar zu den „Siebzig Versen über die Leerheit“ des Nāgārjuna [Kārikās 1–14]*, Tibetan and Indo-Tibetan Studies 6, Institute for the Culture and History of Indian and Tibet at the University of Hamburg, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- KRAGH, Ulrich Timme
[2006] *Early Buddhist Theories of Action and Result: A Study of karmaphalasambandha. Candrakīrti's Prasannapadā, Verses 17.1–20*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 64, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Wien.
- LI, Xuezhong (李学竹)
[2012] “Madhyamakāvatāra-kārikā,” *China Tibetology* 2012 No.1, pp. 1–16.
- MACDONALD, Anne
[2008] “Recovering the *Prasannapadā*,” *Critical Review for Buddhist Studies* 3, pp. 9–38.
- SCHERRER-SCHAUB, Cristina Anna
[1991] *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti: Commentaire à la soixantaine sur le raisonnement ou Du vrai enseignement de la causalité par le Maître indien Candrakīrti*, Institut Belge Des Hautes Études Chinoises, Bruxelles.
- YE, Shaoyong (叶少勇)
[2013] “A Sanskrit folio of the *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* from Tibet,” 『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』 16, pp. 223–240.
- YONEZAWA, Yoshiyasu (米澤嘉康)
[2005] “**Lakṣaṇāṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (2),” 『成田山仏教研究所紀要』 28, pp. 159–179.

- [2013] “**Lakṣaṇāṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhymakāvātārabhāṣya* Chapter VI,” 『成田山仏教研究所紀要』 36, pp. 107–175.
- 奥住 毅 [1988] 『中論註釈書の研究 チャンドラキールティ 『プラサンナパダー』 和訳』, 大蔵出版, 東京.
- 岸根 敏幸 [2001a] 『チャンドラキールティの中観思想』, 大東出版社, 東京.
[2001b] 『『プラサンナパダー』 第 24 章 「聖なる真理の考究」 校訂テキスト (1)』, 『福岡大学人文論叢』 33-2, pp. 1003–1024.
[2001c] 『『プラサンナパダー』 第 24 章 「聖なる真理の考究」 校訂テキスト (2)』, 『福岡大学人文論叢』 33-3, pp. 1761–1782.
[2002] 『『プラサンナパダー』 第 24 章 「聖なる真理の考究」 校訂テキスト (3)』, 『福岡大学人文論叢』 34-1, pp. 197–232.
- 丹治 昭義 [2006] 『中論釈 明らかな言葉 II』 (関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 10), 関西大学出版部, 吹田.
- 那須 真裕美 [2004] 「中期中観派における二諦説の研究 —とくにパーヴィヴェーカを中心に—」, 博士論文 (龍谷大学).
- 本多 恵 [1988] 『チャンドラキールティ 中論註和訳』, 国書刊行会, 東京.
- 米澤 嘉康 [2004] 「Prasannapadā 19.3–7 の解釈について」, 『仏教学』 46, pp. 55–75.

〈Keywords〉 チャンドラキールティ, *Prasannapadā*, 世間的な勝義

にいさく よしあき 東京大学大学院博士課程・日本学術振興会特別研究員 DC1

laukikaṃ paramārtham:

Textual Problems in the Commentary on Chapter 24, Verse 10 in the
Prasannapadā

NIISSAKU, Yoshiaki

It goes without saying that the theory of the two truths of *paramārtha* and *saṃvṛti* is one of the most important concepts in Madhyamaka Philosophy, and that this theory is explained in chapter 24, verses 8-10 of Nāgārjuna's *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK). In 24.10ab, Nāgārjuna uses the word "verbal expression (*vyavahāra*)" with nearly the same meaning as "verbal convention (*saṃvṛti*)" and explains the relationship of the two truths as follows: "without relying on verbal expression (*vyavahāra*), ultimate object (*paramārtha*) is not taught" (MMK 24.10ab).

Candrakīrti's commentary on this part can be found in Louis de LA VALLÉE POUSSIN (LVP)'s text of the *Prasannapadā* (PSP), which is one of the best known commentaries on the MMK, as follows: "without admitting worldly verbal expression (*laukikaṃ vyavahāram*), the characteristic of which is name and what is named and cognition and what is cognized and so on, ultimate object cannot be taught" (*laukikaṃ vyavahāram anabhy-upagamyābhidhānābhidheyajñānajñeyādilakṣaṇam aśakyate eva paramārtho deśayituṃ*) [LVP ed. 494.8–9].

Although the text of the PSP was edited by LVP in 1903–1913, many scholars still use his text even today. However, there are some textual problems in LVP's text and some scholars have begun revising his text by referring to newly-discovered manuscripts. Anne MacDonald, who revised the first chapter of the PSP, regarded six "better" manuscripts as important among about twenty available manuscripts.

In this paper, I will discuss textual problems regarding the term "[*laukikaṃ*] *vyavahāram*" in the preceding quotation from the PSP. Although I checked the six "better" manuscripts and several other manuscripts as well as five versions of Tibetan translations, I found no evidence to support the reading of "[*laukikaṃ*] *vyavahāram*" as is seen in LVP's text.

The term "[*laukikaṃ*] *paramārtham*" is found in almost all Sanskrit manuscripts — except for the Oxford manuscript—, and the term " 'jig rten pa'i don dam pa (**laukikaṃ paramārtham*)" is also found in five Tibetan translations instead of what we would expect for the term "[*laukikaṃ*] *vyavahāram*."

Although a few studies have already dealt with this problem and pointed out that the term "*laukikaṃ paramārtham*" was found in Candrakīrti's *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* and *Catuṣṣatakaṭikā*, there are still a few issues in the interpretation of this expression that need to be looked at again. Accordingly, I will examine these examples again and reconsider them in the context of the PSP.